

2019 年 7 月度定例会議事録

日時：令和元年 7 月 10 日（月） 16：30～

場所：場所：建築資料研究社様 会議室 D

住所：東京都豊島区池袋 2-50-1

議題：「江戸時代の庶民の生活の中に庭、町屋の中のエクステリア」について

参加者：須長、小沼、山澤、犬塚、蒲田、中澤

（連絡事項）

1. エクステリア学会総会の件（ホームページでの告知、個人あてのメールで案内の通り）

①総会への出席のお願い

②歴史委員会の活動報告、活動計画は須長委員長より

2. 本題について

6 月度定例会での話題の通り、これまで江戸の裏長屋の住む層から、当時のエクステリアの様子を探ろうとしたがなかなか、見つからない。よって表店の層を見てみることにした。その中の一部を紹介した。

ここでは、今月の話のつながりとして最低限の文章を復唱します（i. ii. の参考図は 6 月度議事録を参照）

i. 日本の美術 No. 167 表紙裏図版解説より：江戸図屏風の神田の拡大図から

「江戸時代初期の神田。町家は板葺きで、うだつをあげているものが何軒もある。どの家も棟には雁ぶり瓦をのせておさえている。これは関東の農家にもよくみうけられる。屋根のふき板は長板とみられるもの、柿葺きとみられるものがあり、また町のうらには草屋もある。間取りは通り庭を持つ形式で、京都の町家と同様である。江戸の町家は前面通り全体をミセとするのがのちには一般的になる形式であるから、この屏風が描かれたのちにそのような転換があったことがわかる。」

（江戸の初期は、京都と同じく江戸の町屋も「通り庭」の形式から、後に通り全体を店にする間取り。

ii. 江戸の表店のすまい P167

（日本人のすまい：稲葉和也・中山繁信著 彰国社 昭和 58 年からの平面図と立面図

表店の町家は、たいてい商家で、敷地は間口が狭く奥行きが深い。主屋の店は間口いっぱい建て、その背後に、土蔵や納屋、便所や風呂場などを建てる。間口の広い大店の場合は、主屋の脇から塀を出して門を設け、その奥に玄関や客座敷をつくる場合も見られる。商家の典型的な間取りは、表通りから裏に通り抜けることができることができる「通りにわ」を片側にとって、部屋を 1 列か 2 列並べるもので、この形式は京阪地方に多くみられる。表の入口を入ると表庭に接して店があり、その奥が居室部と接客部になっている。大店の家では接客の座敷に裏庭を設けて茶室など数寄をこらして客をもてなした。江戸の表店は、店の間口全体を土間とし、その奥に張り床部を設けて帳場のみせとし、店全体を開放するのが普通であった。この場合、客は土間に入り、店の上り口に腰かけて品定めをした。町家がだんだん過密になりにつれ、みせの間口を広くとれなくなると 2 階屋が発達した。

iii. 図録 都市生活史事典 柏書房 1991 P93-94（2019/07/05 歴史委員会メールに添付資料）

江戸初期の町家は中二階のものが多く、階上は主に物置や使用人の居室に用いられた、後に二階座敷がつくられ、最初は裏の座敷が発達しやがて総二階に変わってくる。また防火対策として、壁や屋根裏を厚く塗り固めた「蔵造り」の建物が享保年間頃から江戸で発達した。

iv. 大岡敏明著 江戸時代 日本の家（人々はどのような家に住んでいたか）相模書房 平成 23 年 P202～

町屋と住居

図 190 は幕末頃の町屋の平面である。

- ・北の表通りに面して小さな町屋が建ち並ぶ。
- ・右端の町屋は間口が四間もあり、奥行きは二間半である。
- ・その奥には中庭を挟んで裏屋の大きな住居が続き、町屋と住居は縁で行き来する。
- ・町屋の店は床の間を備えた九畳の広さで、その表側が半間巾の土間のようにである。
- ・「通り庭」はない。
- ・左には二階への上がり口があるので、二階建ての町屋であった。
- ・裏庭へ行くにはその町屋の左に一間幅の路地がありそこから入る。その路地を入ったすぐ右手には住居へ入る土間玄関があり、そこから店にも住居にも行けるようになっている。
- ・また左には土間の勝手口があって、台所へといたる。
- ・住居の南側には床の間と床脇を備えた十畳の座敷があり、それに続いて次の間仏壇のある部屋などが庭に面して並ぶ。
- ・その左にはこの家の二つの大きな蔵がある。
- ・一方、別棟の住居を持たない小さな町屋も多くあったが、そこでは住居も兼ねていたのであろう。
- ・裏庭の左端にはその町屋に住む町人のための共同便所もあった。



図 190 江戸の町屋の平面
（本多博太郎「図説 日本住宅史」より）

◎以上中澤より

江戸の表店のでも江戸図屏風に見られる初期と江戸名所図会ほかに見られる

中期以後の表店の間取り、外壁、屋根等には相当変化がありもう少し調べてみます。

2. 犬塚氏提供資料

「江戸高名会亭尽」（えどこうめいかいていづくし）天保後期（1830～1844）歌川広重 全30枚

会亭は会席料理屋のことで、会席は茶や俳諧の集りをいい、その席で酒と共に出される料理が会席料理でした。狂句合（きょうくあわせ）の字も見えますから狂句の集りでしょうか。

・ 自然風景、作庭共に趣向を凝らした造り

・ 両国柳橋 河内屋：貸座敷の中の書画会の様子が描かれている。画家の描いた画に見入る客、芸者、仲居など、会の雰囲気を与えている。画面奥には、書に擬して白粉「仙女香」の宣伝文が書かれている。



画賛の川柳は「平清で 奢ったはても うしほひら」は、平清を平清盛にかけ、うしお（潮）ひらは塩味仕立ての吸い物のこと。奢った果ての平家一門が壇の浦の潮流の藻くずと消えたこと踏まえたもので、平清の料理の贅沢さが偲ばれる。



江戸を二分したのが日本堤山谷（さんや）の「八百善」（やおぜん）と
深川八幡前の「平清」（ひらせい）。

・ 大音寺前 田川屋：吉原田圃の裏手、鷲明神の西に位置する大音寺（現台東区龍泉）の前の料理屋。吉原帰りの人々が訪れ、庭内には浴場や茶室もあった。



以上です

3. 次回

8月定例会は8月5日（月） 16：30～